

# ゴジラ

## 映画文学人生論

原作：香山滋 (1954年)  
監督：本多猪四郎 (1954年) 特殊技術：円谷英二  
出演：尾形秀人 宝田明 脚本：村田武雄 本多猪四郎  
山根恵美子 河内桃子 撮影：玉井正夫  
山根恭平 志村喬 音楽：伊福部昭  
芹沢大助 平田昭彦

あのゴジラが最後の一匹だとは思えない

ゴジラ誕生のきっかけは昭和二十九年三月一日にビキニ環礁で行われた水爆核実験、そして、その実験で乗組員とマグロが死の灰をあびた遠洋マグロ漁船第五福竜丸事件である。

原作者は香山滋だが、水爆を象徴するような大怪物を、おもう存分暴れさせる映画の原作を香山滋に依頼してきたのは東宝のプロデューサー田中友幸。いくら費用がかかってもいいという。

そこで、香山はゴリラとクジラの連想からゴジラという怪物を思いついた。ゴジラは二百万年前に海棲爬虫類から陸上獣類に進化しかけた生物とし、海底にひそんでなんとか生きのびていたところ、水爆実験で生活環境を破壊され、水爆の放射能を蓄積して火を吐くようになったという設定にした。つまり、人間にとって恐怖の象徴であり、一方では、水爆実験の犠牲者の象徴でもある。

前者の見方をとれば、ゴジラは人類の敵として滅ぼす必要があるが、後者の見方なら絶滅危ぐ種として保存しなければならない。古生物学者の山根博士（志村喬）は後者の見方をとり、水爆の洗礼をあびながら生きのびているゴジラの不思議な生命力を研究すべきだと考えた。

しかし、現実にゴジラが東京に上陸し、建物を破壊し、多数の死傷者が出ると、そんな研究者の立場を優先できなくなる。

山根博士の娘の恵美子（河内桃子）は実験室に



## ゴジラ ———— 映画文学人生論

こもって研究している山根博士の弟子芹沢（平田昭彦）を訪れたとき、彼の研究の秘密を知った。それは、水中の酸素を一瞬にして破壊しつくし、あらゆる生物を窒息死させるオキシジェン・デストロイヤー（液体中の酸素破壊剤）という芹沢が完成させた装置である。

芹沢は恵美子に絶対に秘密をもらしてはいけないと口止めた。これでゴジラを殺すことはできるが、それ以上に大きな危険がある。もしどこかの国が兵器として使用すれば、水爆以上のおそろべき破壊兵器になって、人類を破滅にみちびくだろう。そんな危険の可能性をなくし、絶対に社会のために役に立つようにする方法を発見するまでは発表したくないと芹沢は言った。

恵美子は芹沢との約束を守っていたが、頭に包帯をした愛くるしい少女が放射能の検出を受けている姿を見て、動揺した。ガイガーカウンターに不気味な音が激しく刻まれて行くが、少女はその反応に気がつかない。

恵美子は父と芹沢への裏切りを決意した。芹沢はやむをえず、ゴジラと自分自身を葬るために海中に潜って、オキシジェン・デストロイヤーをゴジラに向け、安全弁を引き抜いた。

山根博士は、暗然とした面持ちでつぶやいた。「あのゴジラが最後の一匹だとは思えない」。

Puとおれのことかとゴジラ哭く